

JMMA

JAPAN MUSEUM MANAGEMENT ACADEMY

No. **70** Vol.19-1
June 2014



基礎・実践部門合同研究会：開催風景



実践部門研究部会：開催風景



近畿支部会：見学会訪問先の交通科学博物館



Contents

- 2 【論考・提言・実践報告】「博物館展示の現在と今後の展開（前編）」 高橋 信裕（JMMA副会長、常磐大学）
- 7 【研究部会開催報告】「平成25年度 第2回基礎部門部会・第1回実践部門部会 合同研究会 開催報告」 菅井 薫（川崎市市民ミュージアム）
- 10 【研究部会開催報告】「平成25年度 第2回実践部門部会 研究会 開催報告」 田代 英俊（JMMA理事、科学技術館）
- 11 【支部会だより】近畿支部会 「平成25年度 第2・3回見学会開催報告」 幸山 綾子（大阪府立弥生文化博物館）
- 16 【海外交流事業】「平成25年度 全日本博物館学会 第5回研究会 研究会 開催報告」 井上 敏（JMMA理事、桃山学院大学）
- 19 【新刊紹介】『博物館展示の理論と実践』 大堀 哲（JMMA会長、長崎歴史文化博物館 館長）
- 20 【インフォメーション】文献寄贈のお知らせ、新規入会者紹介、法人会員一覧

論考・提言・実践報告

博物館展示の現在と今後の展開（前編）

高橋 信裕（JMMA副会長、常磐大学）

はじめに

コンピュータテクノロジーの進展を背景に、人々を取り巻く情報環境が多様化、高度化し、「いつでも、どこでも、誰にでも」のインタラクティブなコミュニケーションがオンラインで交歓（感）可能となった現在、情報の源泉であるオリジン（原物）を集積し、研究し、その成果を博物館の主たる機能の一つである「展示」を通して社会還元する博物館は、現在どのような状況下であり、さらに、その特異性の一つである実体ある現実空間を情報の伝達メディアとする「今だけ、ここだけ、あなただけ」の博物館展示は今後どのように変容していくのか、博物館展示の現在と今後について論述してみたい。

展示構成法の4類型

現在の博物館展示について、その軸足の置き方、構成法、デザイン展開等の視点から整理、分類した。以下、4つの類型にまとめることが出来た。

1. モノ自体が展示の意図や価値を伝える展示（写真1）
2. メッセージ性を持ち、情報メディア等により、知識や情報を伝える展示（写真2）
3. 視覚・触覚・聴覚など五感に訴える体感型展示（写真3）
4. 人と人とのふれあいを通して交流する展示（写真4）

写真1



写真2



写真3



写真4



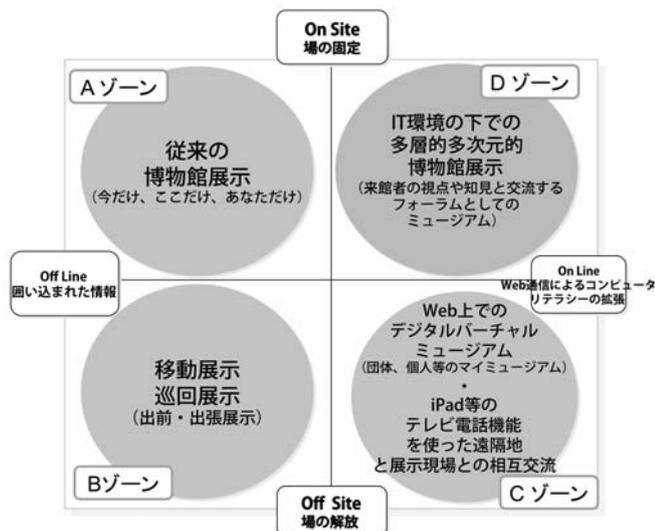
展示形態及びメディア一覧

また、これらの展示構成に採用される展示の装置や設備、活動のファシリテーションなどの事業行為に関わるハード、ソフトを一覧表にまとめてみた。



「博物館展示」の特異性と今後の展望

博物館展示を持続可能にしていく構成要素には、「場（空間）」、「モノ（実物）」、「情報」、「運営資金（金）」、「人材（専門職員）」等が挙げられるが、なかでも基本をなす「場（空間）」、「モノ（実物）」、「情報」の視点から展示を捉え、今後の展望についてマトリックスに図表化した。



・「Aゾーン」は、従来の「今だけ、ここだけ、あなただけ」の博物館展示がここに位置づけられる。特別な時間と場を訪れての博物館体験を楽しむことが出来る。

・「Bゾーン」は移動展示、巡回展示といった「場」の規制から解放され、展示が空間的な自由度を確保した展示、いわゆる出前展示、出張展示がここに当たる。

・「Cゾーン」は、Web上でのデジタルバーチャルミュージアムが位置付けられる。また、ネット回線を活用し、博物館現場と教室などの遠隔地とのコミュニケーションをタブレット端末等のテレビ電話機能を使って相互交流が行われる。

・「Dゾーン」は、IT環境の下で、展示者の研究の成果として公開、提示されている「展示」を展示者と観覧者、また観覧者同士の多様な視点や知見が交流するフォーラムとしてのミュージアムが位置付けられる。

1.モノ自体が展示の意図や価値を伝える展示

我が国における社会教育機関としての博物館の認知は、近代に始まる学校教育を補完する「実物教授の場」と言っても過言ではない。それまで寺子屋等で使用されてきた手習い本等は、寺子らの家業に通じる商売往来や百姓往来、職人往来などで、その教育目的も、実用知識の習得であり、教育方法も個々の寺子を対象とした個別教育が主であった。それが近代の学制発布に基づき国の検定、国定による全国共通の教科課程（カリキュラム）による一斉教育に

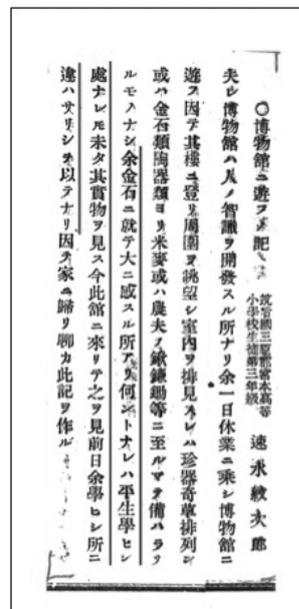
統合され、まだ見たこともない事物や事象等が知識として求められ、そうした座学を補完する実物、実見の教育機関として博物館が求められるようになった。その背景には、近代教育学が課題としてきた事物や事象そのものの観察を通して知識を有効に学び取る教育法、つまり、書物主義や言語主義に対する批判として、具体的、感覚的に理解させる教育方法の提唱と実践への動きがあった。

1-1 「実物教育の場」としての博物館展示

博物館がわが国に定着しつつあった明治中期、その当時、児童、生徒らがどのように「博物館展示」と向き合い、享受していたかについて、その実際的一端に触れてみたい。

引用した文章は、尋常高等小学校3年生の博物館見学の寄稿文で、実物教育の場としての「博物館」の効用が綴られており、教科書で学んだと思われる鉱物（金石）を博物館で実見し、それまで得てきた学習の成果が、確かな知識として習得できたことなど、実物の観察による博物館体験の有効性及び博物館の社会的意義への理解がよく表現されている。

博物館展示は、展示公開されるモノ（実物）そのものの存在や価値を意図的に装い置くことで、知識や感動として伝える情報メディアの役割を担う側面がある。

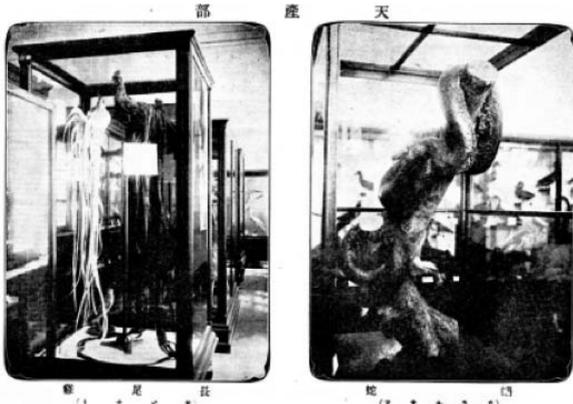


博物館草創期における児童の「博物館体験」
尋常小學校 幼年雑誌號外
日本全國小學生徒筆戰場 第四冊
(明治24年6月16日出版/博文館刊)

1-2 展示はモノ（実物）を「装い置く」行為

モノ（実物）の展示は、博物館展示の基本をなすもので、さまざまな取り組みと改善策が講じられており、それらの成果は特に展示ケースの仕様デザインに顕著に認められる。現代の展示ケースは鑑賞性、保存性、メンテの利便性、セキュリティ対策等実務現場での行き届いた配慮が装備化されている。

「実物教育の場」としての博物館展示



(東京帝室博物館展示室 [少年世界定期増刊第8巻第10号「博物館」] 明治35年7月発行 / 博文館)

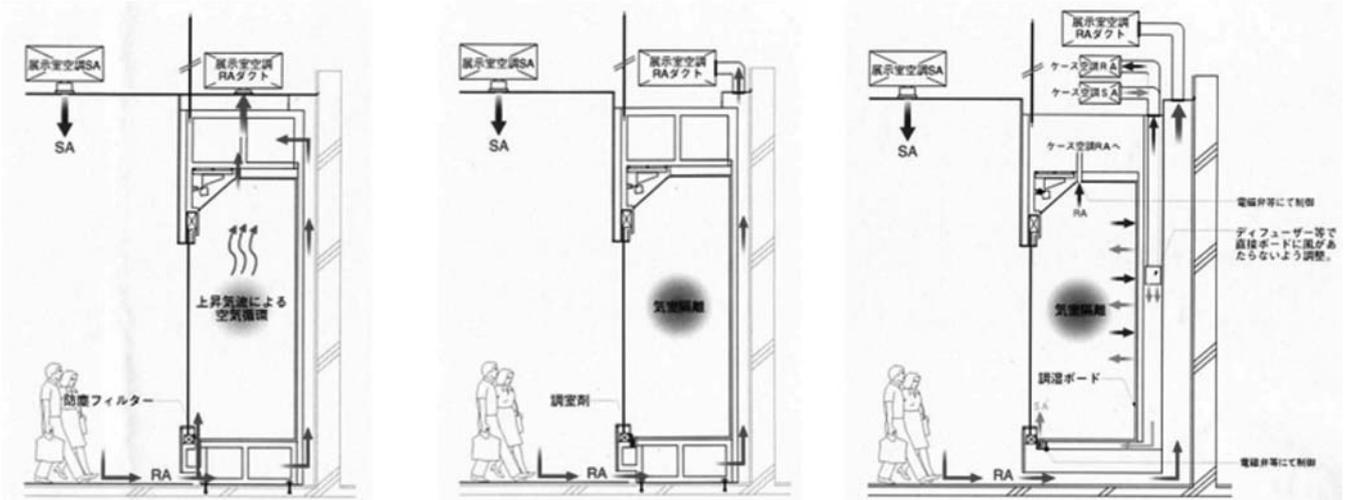
博物館の展示空間の無窓化—防災、防犯、資料保存への対策—



管理された無窓の空気環境での人工照明による展示



展示ケースの3タイプ



自然換気方式 (展示室換気方式)	エアタイト方式 (調湿剤使用方式)	ケース内独立空調方式
ケース内空調を展示室内空調と同調させる方式	ケース内の空気を隔離し、調湿剤により相対湿度の安定をはかる方式	ケース専用の空調機を設け、温湿度管理を行う方式

壁付ケース（密閉式）の仕様例

ガラス開閉部は通常のフラットな状態から、電動若しくは手動制御にて開閉ガラス面を、前面に移動させた後、電動又は手動にて横方向にスライドさせる方式。

照明：F L (紫外線防止管球を使用)/近年ではLEDが普及してきている。
照明は展示空間と別気室とし、管球の交換はユニット毎に、展示室側から、前に引き出して行う。

スポットライト：
器具毎の調光を可能とする
※紫外線カットフィルター等の対策を行う。

ピクチャーレール

熱切硝子：
高透過ガラス+飛散防止フィルム

高透過ガラス+飛散防止フィルム
若しくは、ラミネートガラス

調湿剤収納BOX
(外部メンテナンス扉からの交換が理想)

文化財系（実物）展示

モノの展示には、有職故実の作法に則る展示と見易く美しいデザインセンス、保存科学面での設備的充実、展示替えの効率性、利便性に配慮した仕様設計が求められる。

古美術品展示にも伝統にとられない展示手法があってもいいのではないか



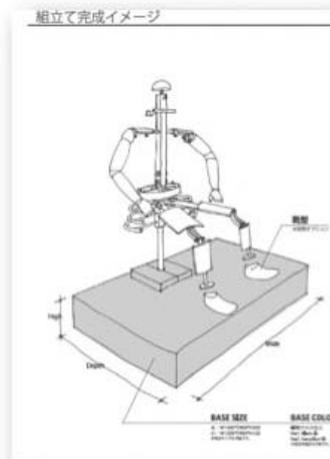
刀と太刀 / 東京国立博物館



有職故実に則った伝統的古美術展示



左：甲冑展示、右：刀（打刀）と太刀の展示



2.メッセージ性を持ち、モノ（実物）とその背後にある歴史、文化を情報メディア等により、知識や情報として伝える展示

2-1 グラフィック展示

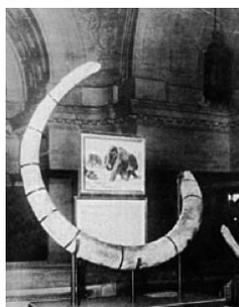
2-1-1 モノ（実物）の情報を担うグラフィック展示

モノ（実物）の展示は、資料や作品そのものの存在が価値を放つ場合であっても、そのものに付帯する情報がパネルやプレート、ラベルなどによって提供される。名称や製作者名、製作年代、用途、素材など、ごく限られた情報量であるが、モノ（実物）のメッセージを伝えるメディアとしてグラフィックによる情報表出は、博物館展示の基本をなすものである。

実物（モノ）とグラフィック展示の組み合わせは、博物館展示の基本スタイル



中国国立博物館



東京科学博物館
マンモス象牙の化石展示
(昭和初期)

2-1-2

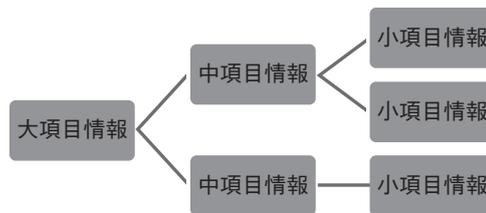
展示者の意図を体系化し、展示にストーリー性を導入

博物館展示を企画、デザインし、動線やゾーニングを手掛ける際に、グラフィック展示の存在は、伝える側の意図や内容を書籍の編集とほぼ同じような構造で整理、体系化することを容易にする。すなわち章（大項目）、節（中項目）、項（小項目）などのツリー構造化したマトリクスで情報を秩序だった層位に分化整理し、それら層位ごとにロゴや文字数、色彩等により規格化、すなわちデザイン統一を図り、展示ストーリーの輪郭を、より鮮明な形に浮き彫りにしていく。

情報を階層別に整理し、それぞれを規格統一化



七宝町七宝焼アートヴィレッジ



2-1-3

モノの意味や価値の表象に絵画や写真等を取り入れ、空間に一種の劇場的イメージ効果をもたらすグラフィック展示

グラフィックデザインには、場所や存在を明示するサイン的な機能、展示意図の語り部的役割を果たすストーリーテラー的機能等とともに、ある状況や現場を臨場感をともなって再現してみせる、疑似的な没入、臨場空間の創出に効果を発揮する事例が見られる。



2-2 立体造形による再現展示

観覧者の興味、関心を触発し、没入感と臨場感をともなって知識を伝達する三次元の立体造形展示。さまざまな学術調査をもとに造形再現する展示装置で、ジオラマやパノラマ等の呼称で博物館資料として常套的に採用されている。

展示の対象をよりリアルに、具体的に視覚化することから一般大衆の理解を容易に導くとともに、モノ（実物・標本）やグラフィック展示等を取り入れ、総合化した情景再現のアトラクション的要素を活かし、展示の「目玉」として位置付ける例も多い。

2-2-1 模造標本

動植物等の実際の姿をありのままにそれらの形態を写し取り、樹脂や化学的代用物等を用いて造形化し、本物そっくりになり博物館資料としたもの。



(続く)

研究部会開催報告

平成25年度 第2回基礎部門部会・第1回実践部門部会 合同研究会 開催報告

菅井 薫 (川崎市市民ミュージアム)

テーマ：1980年代からのミュージアム・マネージメントを再点検—私たちはどこに向かうか—

日時：平成26年3月2日(日) 14:00～16:30

場所：私学会館アルカディア市谷7階「雲取」

参加者：19名

1. 開催の趣旨

今後の博物館のあり方を考えるため、本学会では「社会の中の博物館という観点から、博物館が社会に働きかけ、よりよい社会に変えていくプロセスに博物館がどのように寄与すべきか」を研究している。今後は、社会の中の博物館を考えるため、博物館以外の方も招いて研究会を実施したい。

わが国の博物館の歴史を振り返ると、明治期から戦前までの博物館の基本的な枠組みの確立した段階、戦後のアメリカの社会教育政策の影響下で博物館制度を確立した段階、1980年代の「生涯学習社会」の中で行われた「教育普及重視」の博物館運営の段階、指定管理者制度施行から現在までの段階と4段階を考えることができる。

本研究部会では、「よりよい社会の実現のための博物館の在り方についての理論」と「社会への働きかけとしての実践」を組み合わせたミュージアム・マネージメント学の体系化を目指し、「学芸員の研修制度改革」や「対話と連携の博物館」の策定から「指定管理者制度の導入」までの経過を詳細に振り返り、今後の方向性を考えることとした。今回は、博物館教育の成り立ちから1980年代の日本の状況と「対話と連携の博物館」提言の経緯について振り返る。

2. 論点整理

発表に先立って、司会の高安礼士氏より、今後のミュージアム・マネージメントのあるべき方向性について、以下の(1)～(6)の観点／論点が提起された。

(1) 博物館とは何か — 博物館における教育普及活動 —

本来博物館は、どのような経緯で始まったものなのか。また、収集された資料はどのような事情で、公開されることとなったのか、またその延長上で博物館教育が始まったのか。

(2) 日本における「対話と連携の博物館」の意義

平成9・10年に実施された「学芸員の資質向上の方策に関する調査」は、それまで個人的・個別に行われていた海外の博物館先進国における「学芸員養成と能力開発」の総合的な調査であった。その結果は、教育重視の博物館運営、米英仏の整った学芸員養成制度、初めて知る先進国の地域博物館の動向等から、「対話と連携の博物館」に至るヒントとなった。

(3) 日本における博物館関連学会の役割

— JMMAの活動を中心に —

1995年に設立された日本ミュージアム・マネージメント学会は、博物館をミュージアムとして広く捉え、地域の生涯学習の拠点、観光拠点、大学ミュージアム、エコミュージアム等のコンセプトを提案し、とりわけミュージアムの中核機能が「ミュージアム・コミュニケーション」にあるとした。

(4) 学芸員養成制度

2009年に改正された学芸員養成科目は、どのような考えで制定されたか。

(5) 国際基準の中の日本の博物館

日本のミュージアムは、国際基準の中ではどのように考えることができるか。

(6) 指定管理者制度施行後の博物館

常勤職員の比率が低下する日本の博物館経営。現場の現状はどのようなものか。

3. 博物館と教育機能—その歴史と日本の特徴

吉武弘喜（北九州市立美術館協議会会長）

(1) 日本の博物館の特徴—米独との共通性

博物館の社会的意義のとらえ方については、後れて近代国家形成に入ったアメリカ、ドイツ、日本に共通するところがある。それは博物館による国民一般の啓蒙教育を重視した点であり、特に科学博物館による科学技術教育を重視した点である。アメリカではスミソニアン博物館のジョージ・ブラウン・ゲード（魚類学）が積極的な博物館運営を提唱し、一般市民にわかりやすい科学展示を工夫した。ドイツではオスカー・フォン・ミラー（機械・電気工学）が政府に働きかけて世界で最初に国立の科学博物館が創設された。彼らの考え方は棚橋源太郎など日本の博物館のリーダーたちにも大きな影響を与えた。



(2) 日本の博物館の特徴—特殊性

欧米諸国とは富の力に大きな差があり、博物館の存在意義についての国家・国民の意識にも大きな違いがあった。自然災害が多く貧しかった日本では、仏教の影響もあって、古い物は朽ち果てるものという諦観があり、「保存」に大きなリソースを使う思想がなかった。その結果、博物館の規模、数、マンパワーには彼我の間に大きな差があった。今でもナショナルな博物館の差は大きく、スミソニアンには6,300人のスタッフがおおり、1博物館平均で二百数十人になる。ニューヨーク自然史博物館には1,200人以上のスタッフがいるが、日本の国立科学博物館の定員は127人にすぎない。

(3) 教育事業の普及

博物館の教育普及活動の面でも10年ぐらい前までやはり差があり、日本は後れていた。

日本で博物館の教育普及活動が全国的に広がりを見せるのは博物館自体の数が増えた1980年代後半ぐらいからである。ただし、日本でも大正時代には東京教育博物館の通俗教育館において実験や操作ができる科学教育展示を導入していたり、昭和戦前期には各地の師範学校の郷土館において学生に資料調査をさせるなどの先駆的な取り組みがあった。

ボランティアの導入は博物館における教育普及活動を促進する重要な要因である。1971（昭和46）年の社会教育審議会の答申で既にボランティア活動の促進が提言されているが、当時は、戦時中の主婦動員による奉仕活動をイメージさせるということで社会教育の学会でも反発があった。1974年に北九州市立美術館ができたとき、アメリカの美術館を参考に作品解説にボランティアが導入されたが、批判的な意見も多く、なかなか他の美術館などには広がらなかった。1986年に国立科学博物館が教育ボランティアを導入したことで、文部省も社会教育施設の活性化と国民の生涯学習促進という観点からボランティア活動の奨励に本腰を入れるようになり、その後、博物館の数の増加とあいまって博物館の教育普及活動が全国的に広がったといえよう。

(4) 教育事業の広がり課題

現在、日本の博物館は数も増え、教育普及活動にも力を入れているといえるが、課題も多い。受け身の活動が多く、年齢層別や学校向け、教員向けの対応などできめこまかいサービスがまだまだ十分ではないこと、友の会の設置率が低いことなどがある。なお、「教育」という言葉を敬遠してコミュニケーションと言い換えたりすることが近年増えているが、そのことによって、博物館の教育的な役割とそれを支える研究の重要性が忘れられないようにしてほしい。

4. 「対話と連携の博物館」（2000年日博協）策定の経緯

佐々木秀彦（東京都美術館交流係長・学芸員）

(1) 「対話と連携の博物館」とは

国全体、全省庁で地方分権、規制緩和の動きが出てきた。例えば、「公立博物館の設置及び運営に関する基準」（48基準）の見直しが挙げられる。文科省から日本博物

館協会（以下、日博協と略す）に委託され、中川志郎氏が中心となって検討された。中川氏は理想を高く掲げ、21世紀に向けたミュージアム全体がどうあるべきか、広範な検討が始まった。当初は全国の館長クラスの方たちを集めたが、議論が進まず、中堅（部課長）と若手が参加して、検討した。「対話と連携」という基本理念は中川氏のアイディアである。



（2）「対話と連携」の展開

「対話と連携」で検討されたことが、博物館法改正の基調となった。しかし法改正は不十分で、特に学芸員養成科目の改正は中途半端になってしまった。単位増、負担増となり、養成内容は十分とはいえない。

「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準について」は、日博協での検討がよく反映できた。文科省の委託費で日博協が先進事例を調べ、議論し、委員会が報告書を発行した。ただし、現場の人がどれだけ研修や報告書を知っているかについては疑問が残る。組織的な取り組みの弱さは課題である。

（3）「対話と連携」の意義と成果

目指す目標ではなく、どう活動を展開するのか、その手法や基本姿勢が「対話と連携」である。欧米の大規模ミュージアムと同じような取り組みを、急に日本でしようとしてもできない。各館、関係機関との対話と連携により、総合的にミュージアムパワーを高めよう、総合力で乗り切ろうという考え方である。そのためには各館の拠り所、「使命」が重要である。これは、建設から運営に力点に移る成熟社会にフィットした切り口だったのではないだろうか。

（4）各館での取組 東京都美術館の事例から

「対話と連携」の理念を具体的に展開している例として紹介したい。利用者が当事者として関われる活動として、「東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト」が始まった。1年目は、50人枠に二百五、六十人が応募してきた。働いている20、30代の女性が多い。年間延べ200日近く活動をしている。活動の特色として自らの提案を実現する取組みがある。具体的には、ミニコミ誌の発行、紙芝居、体験型プログラムの実施などがある。与えられた活動ではなく、場を設定すれば、自ら考え、行動する人が数多くいることを実感した。日常ではない深い体験ができることが魅力であるようだ。ボランティアな活動を行っている人の志の高さやアウトプットの豊かさを目の当たりにして、ミュージアムにとっての当事者とは誰なのかを考えさせられる。

昨年度からは、「Museum Startあいうえの」が始まった。ミュージアムリテラシーがベースにある。上野での連携は、年2回、上野のエducator中心の会をやっていた。インフォーマルな集まりからフォーマルな集まりへと発展していった。今後は、「連携するプラットフォーム」となる実行部隊をつくり、上野の文化をコーディネートするプログラムを行う夢を描いている。

（5）今後の課題

① 次の10年の展開 新たなキーワードは？

ミュージアムの当事者は誰なのか、職員以外でも当事者たりえる。自己統治力の確立、ガバナンスの再構築が必要となってくる。また別の切り口としてMALUI（Museum, Archive, Library, University, Industry）連携がある。今後、施設の老朽化が切実な問題になり、建て替え、改修ができるのかといった問題が起こる。これは図書館、公民館にもいえる。単なるコンパクト化、機能の集約化ではなく、連携・融合による新しい価値づくりが課題となる。

② 各所で「対話と連携」を促す仕組みづくり

博物館界から発信する施策は、中長期的展望を持つ必要がある。地域での横のつながりを持つと同時に、相互評価や相互支援が求められてくるのではないだろうか。

研究部会開催報告

平成25年度 第2回実践部門部会 研究会 開催報告

田代 英俊 (JMMA理事、科学技術館)

テーマ：『ミュージアムラボ・コミュニケーション
技術展2014』

日時：平成26年3月5日(水) 13:00～16:30

場所：大日本印刷株式会社 DNP五反田ビル

参加者：11名

1. 開催趣旨

実践部門研究部会では、平成25年度のJMMAの大会テーマである「社会のためのミュージアム 一つながる仕組み」を踏まえ、博物館と社会をつなげるための展示技術について考察する一環として、大日本印刷株式会社（以下、DNP）が開催している「ミュージアムラボ・コミュニケーション技術展 2014」を視察見学及び講演を行った。美術作品の新しい鑑賞方法を提案することに取り組んできたDNPとルーヴル美術館の取り組みを通じて、研究部会参加者により良い展示活動、ミュージアム・コミュニケーション活動を展開するヒントが得られればと考えたからである。以下、研究会における見学の概要を報告する。

2. プログラム

- 13:00 現地集合／受付
- 13:15 テーマセッション見学プログラムスタート
※2グループに分けて見学
- 15:00 見学プログラム終了
- 15:10 『ルーヴル-DNPミュージアムラボの取り組みについて』講演
- 16:30 見学会終了

3. 見学・講演概要

今回の技術展は、DNPがフランス・ルーヴル美術館と2006年より取り組んでいる共同プロジェクト「ルーヴル-DNPミュージアムラボ」の中で誕生させた様々な魅せる展示技術（デジタルテクノロジー）を集約したものである。展示されたのは第1回「テオドル・ジェリコー〈銃騎兵〉」（2006

年開催）から第10回「古代ギリシアの名作をめぐって 一人 神々 英雄」（2013年開催）で開発された18の展示物である。どの展示もICT技術を使った体験型展示であり、今回の研究部会では実際にその場で、展示物を操作しながら開発の経緯や、そこに使われた技術の詳細を紹介していただいた。

具体的には、無地の陶磁器にプロジェクションマッピングを行い、様々な図柄を陶磁器上に浮かび上がらせ、絵柄や色合いが凹凸のある陶磁器上で見たときどのように見えるかをシミュレーションすることができる展示や、サミュエル・ファン・ホーホストラテンの〈部屋履き〉を題材に、絵の中の照明や部屋の間取りをシミュレーションして絵の中の部屋の状況を推理させる展示等、非常に能動的な鑑賞体験を来場者にもたらす展示物ばかりであった。

見学の後、DNP C&I事業部 久永一郎室長から『ルーヴル-DNPミュージアムラボの取り組みについて』と題して、DNPがCSR事業として何故ルーヴルと共同して鑑賞システムの新たな開発を行っているのか、事業コンセプト、開発プロセス概要、評価分析手法等について紹介していただいた。久永室長の話の中で特に印象的だった点は、ルーヴルと実施してきたICTを使った美術鑑賞の様々なアプローチ方法を通して、美術作品の見かたが変わることの楽しさや驚きを実感してほしいとの言葉であった。今回の技術展はまさしくこの言葉を具現化したものであった。個人に内存する美術鑑賞の多様性をICTを使うことでより拡大し、美術作品の見かたが変わることの楽しさを実感することができる展示物として仕上がっていると感じた。また本技術展は単に美術鑑賞の技術展示の枠にとどまらず、歴史館、科学館、動物園等様々な博物館施設の展示で応用ができる可能性やミュージアム・コミュニケーション活動を展開するヒントを見出すことができたことから、今回の研究会参加者にとって、美術館はもとより美術館以外の方々にとっても有意義な場となったのではないかと考える。

支部会だより

近畿 支部会

平成25年度 第2・3回見学会開催報告

幸山 綾子 (大阪府立弥生文化博物館)

【第2回見学会】交通科学博物館

実施日：平成26年2月28日(金)

実施形式：自由見学

まず、今回の見学会は4月6日の閉館を前に見学者が増えているとのこともあり、団体での見学対応は終了した後のことであった。そのために、当学会での見学も自由見学となった。

交通科学博物館のあゆみ

交通科学博物館は、大阪環状線の完成記念として1962(昭和37)年に弁天町駅に隣接する土地に開館した。

まず、大阪環状線の歴史から紹介する。大阪環状線は、1895(明治28)年に天王寺～玉造～大阪の東側が完成していた。その後、大阪湾の整備と発達によって扱う貨物が増加、川の輸送から鉄道での輸送が必要になり、環状線の西側の貨物路線(西成線・大阪臨港線)が整備される。

大阪環状線が環状線となる計画は、昭和に入ったころ持ち上がるが、戦争などにより立ち消え、ようやく1953(昭和28)年に府や市によって計画が始まり、1956(昭和31)年に着工する。1961(昭和36)年には西成線と大阪臨港線の間がつながり環の形ができる(大阪臨港線はなくなる)。

そして、つなぎ目だった西九条駅を改修し、1964(昭和39)年に大阪環状線となった。今年で50周年である。現在、西成線は桜島線となっている。

交通科学博物館がある弁天町は、この大阪環状線の西側、西九条駅の隣駅である。

交通科学博物館ができるまで、交通系博物館は東京にあった交通博物館だけであった。大阪にも分館を、との考えがあったが、独立した展示内容の博物館として設置され、当初の名称は交通科学館であった。展示のコンセプトは、鉄道や交通機関の歴史・流れというよりは、鉄道をはじめとする交通機関の現在・未来であったようだ。

開館後1964(昭和39)年に、文部省によって博物館に

相当する施設の指定を受ける。

運営は、財団法人 日本交通公社が国鉄に委託されていたが、1970(昭和45)年に国鉄の外郭団体になり、JR発足後は、JR西日本とJR東日本が共同で引き継ぐが、東京の交通博物館が閉館となったのちはJR西日本の関連組織である公益財団法人 交通文化振興財団による運営となっていた。交通文化振興財団は、京都の梅小路蒸気機関車館も運営している。

開館当初車両(鉄道)は蒸気機関車1両、客車3両の保存展示であったが、開館後に増えていき、展示施設の増設も行っている。

1965(昭和40)年には入館者数100万人、翌1966(昭和41)年にマシ29形食堂車が展示車両に加わり食施設として使用されるようになる。また、KAL-1小型機が展示に加わる。

1967(昭和42)年には200万人を達成。1972(昭和47)年、鉄道100年の記念。京都の梅小路蒸気機関車館の開館に伴い、収蔵していた車両の一部を移管。

1975(昭和50)年入館者数500万人。

1978(昭和53)年、国鉄ハイウエイバス1号車が展示車両になる。また、0系新幹線4両が加わるため増築。

1981(昭和56)年、リニアモーターカーや、三菱の500A11型軽自動車、ダイハツのミゼットMPA型が展示車両に加わる。

1984(昭和59)年、第二展示場が整備される(常時公開は1986・昭和61年から)。

1986(昭和61)年、入館者1000万人達成。

1990(平成2)年、交通科学館から、交通科学博物館へ名称が変更される。資料のデータベース化が始まる。第二展示場改修、北口ゲート設置。

1991(平成3)年、7100形蒸気機関車義経号が展示車両に加わる。

1993(平成5)年、屋内展示場リニューアル。

2000年(平成12)年、英国国立鉄道博物館と姉妹提携

を締結。

2002（平成14）年、屋外展示場にプラットホームプラザを新設。

2004（平成16）年、蒸気機関車義経号など4両が鉄道記念物に指定される。

2005（平成17）年、第二・第三展示室リニューアル。

2006（平成18）年、東京の交通博物館が閉館、一部資料を移管。

2007（平成19）年、第四展示室をリニューアル。

2008（平成20）年、0系新幹線4両が鉄道記念物に指定される。第五・第六展示室リニューアル。

2012（平成24）年、開館50周年。

2014（平成26）年、開館から52年をもって閉館。

そして、2016（平成28）年春、京都の梅小路に京都鉄道博物館として開館する予定である。

展示の構成

展示は、屋内展示場（展示室が第一室から第七室）、屋外展示場、第二展示場と3つのエリアに分かれている。

屋内展示場は、常設展示室が8つと企画展示室がある。



（写真は屋内展示場入口：撮影 筆者）

第一室は、「明日へむかって」で、まずはリニアモーターカーが目飛び込んでくる。このリニアモーターカーは、宮崎の実験場から収蔵されたもので、マグレブML500という。リニア新幹線が現実になろうとする現在からみても、軽自動車より小さいリニアモーターカー、リニアの実験車から日本のリニア新幹線が動き出したのだと感ずることができる。500系新幹線からリニアまで模型がある。また、0系新幹線の1号車（鉄道記念物）客車、食堂車には入れず、代わりに運転席に入ることができた。



（写真は0系新幹線運転室：撮影 筆者）

第二室は「鉄道の誕生」。ワットの蒸気機関が5分の3サイズでつくられている。そして、明治時代の駅舎の様子が再現されている。大阪駅の時鐘、1800形蒸気機関車、三等客車。大阪駅の移り変わりも模型で知ることができる。

第三室は、「鉄道のおいたち」。新橋～横浜で鉄道が敷かれておよそ40年で日本の主な鉄道網は整備された。そして、昭和初期から日本独自の鉄道の歴史が始まる、具体的には新幹線の開発など。明治からの切符のコレクションで移り変わりがわかるようになっている。第三室では、貨物輸送のあゆみも模型で分かるようになっている。

第四室は「列車運行と車両のしくみ」。蒸気機関車のナンバープレートが並ぶ様子は圧巻である。鉄道の始まりは蒸気機関車で、いろいろな種類が走っていたと分かる。

安全運行のシステムとしては、221形運転シュミレーターで運転士と同じような運転体験（映像はJR東日本管内のもの）ができる。また、パンタグラフの変遷や、ディーゼルエンジンの仕組みも実際に動いていてメカニズムを知ることができる。また、見学者が動かすことのできる大きなジオラマがあり、ひかりレールスターや223形の電車などを動かすことができ、信号などの役割を学ぶことができる。

第五室「鉄道の施設としごと」では、信号や線路の部品など、鉄道を支える施設について学ぶことができる。信号は、屋内展示場にもあるが、大型の遠方信号機などは、屋外展示場で見ることができる。

第六室「鉄道とくらし」。近畿の鉄道会社のあゆみと、近畿の鉄道の広がりについて知ることができる。JR、京阪、阪急、阪神、南海、近鉄の各社。そして各社の代表的な車両と制帽が展示されており、各社の歴史をまとめてある。また、二代目京都駅（国鉄）のシャンデリアや、熊野詣織物壁画など、鉄道の社会へ与えた影響と文化も知ることが

できる。

第七室「航空・船・自動車のあゆみ」。ここで鉄道以外の交通機関について、主に日本の技術の歴史がわかる。飛行機エンジンやロケットのエンジンは実物が展示されている。また、自動車は、スバル・ダイハツ、アメリカのサンフランシスコケーブルカーは1963（昭和38）年から展示されている。さらに、ホンダなどオートバイの変遷、東名高速道路開通とともに東京大阪間を走った国鉄ハイウェイバス1号車（ドリーム号）が展示されている。東京の交通博物館が閉館してからは、とくに、このエリアの展示が増えたようだ。

屋内展示場の一番奥に、「模型鉄道パノラマ室」がある。ここでは、実物の80分の1の車両がジオラマを走る。学芸員が説明しながら走らせていたようだ。残念ながら見学当日は走る様子を見ることはできなかった。車両基地やいくつかの駅、街や郊外を表したジオラマは巨大で、子どものみならず大人にも人気があったようだ。新幹線・トワイライトエクスプレスをはじめとする特急・通勤電車など様々な電車がかった。

常設の展示室のほかに、屋内展示場には、企画展示室がある。見学時は、「52年の軌跡展交通科学博物館さよなら企画展Part2 1962→2014」であった。この企画は、交通科学博物館の歴史を振り返るとともに、現在は常設展示室には置いていないが、過去に置いてあったものを見ることができる企画展示であった。



(写真は企画展示室：撮影 筆者)

外へ出て、第二展示場へ。第二展示場は、1984（昭和59）年に整備されたところである。ディーゼル機関車が二台、踏切のポイント切り替えを体験できる装置はやり方がどうにも分からず体験できなかったが、そのほか保線機器が展示されていて、第五室の展示の補足にもなっている。また、小さな建物内には「世界の車窓」という装置がある。こだまの椅子に座ってボタンを押すと部屋の壁に設置し

た画面から映像が流れる仕組みになっている。見学時はフランスの鉄道であった。

第二展示場は、この「世界の車窓」の小屋以外は露出展示（屋根はついている）である。

第二展示場から屋内展示場へ戻ってから、屋外展示場へ出る。第二展示場も外の露出展示だが、屋外展示場とはつながっていない。屋外展示場は、実物車両の展示が主である。「プラットホーム・プラザ」は、二代目京都駅の1番ホームを再現しており、上屋は再利用されている。ここでは、明治から昭和の鉄道車両の移り変わりを実物の車両で知ることができる。ただし車両には入ることができない。まず、233形蒸気機関車、C62形蒸気機関車、D51蒸気機関車がある。子どもから大人まで今でも大変人気のある車両である。キハ813形ディーゼル動車は特急車両として使われたもので、見学時には「くろしお」のプレートがついていた。さらに、80系電車は、東海道線車両で、緑とオレンジの湘南電車と言われるものである。スシ28形食堂車。また、マロネフ59形寝台車は、皇族・華族専用の寝台車だったものである。展示車両の中に入れる日もあるようだが、見学時は入れなかった。

プラット・ホームプラザとは別区画に、7100形蒸気機関車「義経号」がある。義経号は、北海道を走った蒸気機関車で、1952（昭和27）年に鷹取工場で動態保存機として復元され、1991（平成3）年から当館で展示されている。

以上が屋外展示場の概要である。



(写真はプラットホーム・プラザを外からみたところ：撮影 筆者)

まとめ

見学会は閉館が決まった後企画されたため、土日休日はさらなる混雑が見込まれ、平日に行ったが、ジオラマのライブや展示車両への立ち入り等、体験できないことが多くあり、少し残念な思いもした。

第六室の、各社の紹介の部分では、模型などもJRのみ最新車両に更新されており、JRのみヘッドライトが点灯していたことは印象的である。鉄道以外のものが第七室にまとめられていることも、JRが運営する施設の限界なのだろうか、と感じた。東京の交通博物館が閉館し、さいたまに鉄道博物館ができ、大変人気施設となっている。そして、大阪も、交通科学博物館が閉館し、京都の梅小路蒸気機関車館と合併し、京都鉄道博物館となる予定である。鉄道に特化することは、他の収蔵品は手放すか、お蔵入りするか、展示が大幅に縮小されると考えられる。トヨタやホンダなどは博物館など展示室を持っており、他の鉄道会社でも、南海や京阪など展示施設を持つところが増えてきている。今後は、それぞれの場での展示が充実することがJRにとってもいいことなのではないか、と思うのである。

原稿を執筆している現在、蒸気機関車義経号は、すでに京都へ搬入されている。実物車両はほぼ京都へ移るようだが、一方で学芸員が解説した巨大なジオラマは老朽化も進んでいるため、京都に継承できないことが決まっている。52年もの歴史のある博物館は昭和のノスタルジックな雰囲気を残し、使命を終えた。同時に大阪環状線もリニューアルの計画が始まっている。鉄道は、日々安全と快適な運行のために進化しているのだ。新しい環状線と、新しい博物館が楽しみである。

参考文献：JR西日本 大阪環状線パンフレット・交通科学博物館年表

【第3回見学会】竹中大工道具館

実施日：平成26年3月22日(土)

実施形式：団体見学

研究員 大村 都さんに解説していただいた。



(写真は博物館外観：撮影 井上敏)

竹中大工道具館の概要

竹中大工道具館の母体となる竹中工務店は、創業が1610(慶長15)年と業界で最も歴史のある会社である。竹中大工道具館は、竹中工務店創立85周年の記念として、1984(昭和59)年に神戸市中央区山手に開館。1899(明治32)年に竹中工務店が創立した地であった。

大工道具とは、品質の良いものほど磨滅するもので、後世に残りにくい物であり、機械化・電動化によって大工道具そのものが消滅するのではないかと危惧もあった。さらに、建築の工法などが変わってきていることもあり、古い時代の道具・優れた道具を収集、保存、研究、展示することで工匠の精神や道具鍛冶の心を後世に伝えるために、設立された。

今までに収集したものは250,000点あまり、主な収蔵品は、大工道具が15,946点、文献史料8,174点のほか、音や映像資料が777点、などが含まれている。

展示室は地上1階から3階、地下1階には多目的ルームと、ビデオライブラリー、宮大工さんの作業室がある。

映像資料は地下1階のビデオライブラリーで閲覧することができるようになっている。

地下1階多目的ルーム

展示室見学の前に、多目的ルームでビデオ「棟梁」を見た。宮大工の棟梁のお話したが、棟梁とは、仕事とはということ聞き、300年後の未来に残る仕事をきっちりすることの厳しさを感じた。

普段は、今回見せていただいた「棟梁」のほかに「数寄屋大工」など大工の技と心のシリーズが7作品、「縄文の技」など道具の歴史シリーズが8作品など、全部で69作品あり、地下1階のビデオライブラリーで見ることが可能である。

展示室概要

展示は、極める、造る、伝える、の3つのテーマで展開している。展示室へは、まずエレベーターで3階へ上がり、順に降りてくる方式となっている。2009(平成21)年にリニューアルを行っている。

伝える(3階)では、道具の歴史を振り返る。世界の道具と比べる。として、「道具はどのように伝えられてきたのか」をテーマに、日本における道具の発達史をトピックごとに振り返る。日本の建築史を背景に、時代を代表する建築と、それを造るために使われた道具の復元品や実物を対

比的に紹介している。縄文時代の石斧から。大型の模型と「見たままナビ」で具体的に詳しく知ることができる。見たままナビは、タッチパネル式の端末で展示されている道具について、映像や写真で使い方などを詳しく知ることができるようになっている。展示室の中央には、石斧から鉄斧への転換期などが大型模型で示されている。

さらに、アジアやヨーロッパ各国の道具と日本の道具を比べて相違点や互いの特徴を知ることができる。



(写真は大型模型と見たままナビ：撮影 井上敬)

造る(2階)は木で建築を造る大工の技。鉄で道具を作る鍛冶の技。をテーマに材木や大工道具鍛冶の仕事について学ぶことができる。木の建築はどのように造られているか、ということで、山から木を伐りだして材木に製材するところから始まる。木を伐る大型の道具から、大工が荒加工から仕上げに使う一連の道具を解説する。鍛冶の仕事は、仕事場を再現してあり、映像を見ることによってより理解が深まる。それぞれのコーナーに、「見たままナビ」が設置されている。

材の表情のコーナーは、5種類の材の表面に触れたり、鉋で削ったものに触れたりすることで手触りや香りの違いを知ることができる。そのために、鉋かけを定期的に行っている。

継手と仕口のコーナーでは、建物の骨組みのため、重い屋根を支えるための工夫で、パズルのように複雑に組む体験ができる。

極める(1階)は「用を極め、美に至る」機能を超えて、輝きを放つ道具たち。をテーマに、大工がこだわった道具、鍛冶職人が極めた道具を紹介する。宮大工が修行のためにつくった法隆寺五重塔の20分の1サイズとともに、名工の鍛えた道具を見ることができる。LEDの照明と黒を基調とした展示室で見る道具は芸術品のように感じられる。また、最盛期の大工道具一式標準編成で179点が壁一面に並

ぶ。大工は、その日その日の作業に合わせて必要なものを選び道具箱に入れて現場に出て行ったそうだ。

真樺の無垢板は、一枚刃の鉋で削ったものである。江戸時代までは鉋は一枚刃であったが、明治に入り、材木の逆目を防ぐために二枚刃になった。現在では二枚刃が標準で、一枚刃は高級な材木を仕上げるときに使われる。一枚刃では艶が出て滑らかに仕上がる。この無垢材も触って確かめることができる。

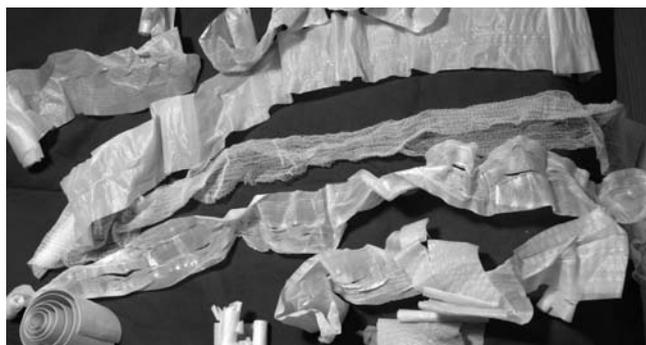
大工という仕事が江戸時代の子どものためにあこがれの職業だったということも、この展示を見ると納得である。

鉋削り体験

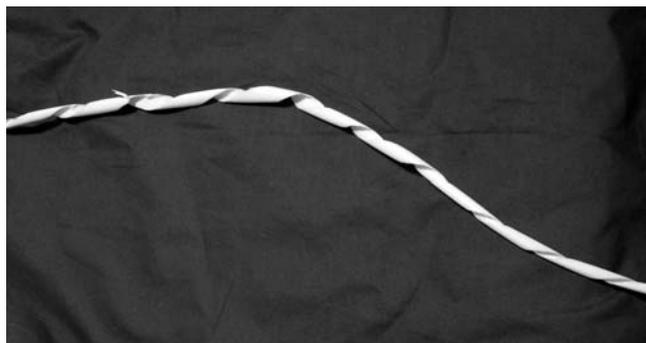
通常、鉋削り体験は開催日時が設定されている。台鉋削り・ヤリガンナ削り・海外の鉋・木の香り体験などができる。場所は多目的ホールの隣の技能員の作業室である。技能員さんの実演を見るだけで感動するが、技能員さんの指導の下実際に削ることができる。事前に調整しておいていただいた鉋を使うため楽しく削ることができる。

ヤリガンナは、平らに長く削ることが難しい。さらに、見学当日は、墨壺の体験もさせていただいた。まっすぐの線を引くことは難しかった。迷わない・集中する、ということが大事である。

また、色々な種類の木材を削ることで、削りたての香りの違いなども知ることができる。



(写真は、台鉋で削った木材：撮影 筆者)



(写真は、ヤリガンナで削った木材：撮影 筆者)

竹中大工道具館の来館者分析

見学時案内していただいた大村さんのお話によると、道具館の来館者は、中高年の男性が多く、その次に建築を勉強している大学生や高校生が多いそうだ。子どもをつれて来る母親層が多くない、とおっしゃっていた。普段あまり多くない女性層などへの働きかけとして夏休み子ども体験教室などで保護者同伴のイベントをやっている。

出前授業

神戸市の小学校5年生が使う教科書に「千年の釘にいどむ」という鍛冶職人が和釘再現に挑戦する文章があることから、小学校への出前授業も積極的に行っている。

「大工さんの七つ道具」「千年の釘にいどむ」などのビデオや講義に加えて、技能員による鉋削りの実演などを行っている。

まとめ

衣食住の住居は、人間の営みとともに始まり、切り離せないものである。さらに、日本という地域の特性などもあり、外国の影響を受けながらも日本独自に発展した建築。建築を支える大工さんと大工さんの道具をテーマにした博物館は専門的すぎるのでは、と今まであまり詳しく知らなかった。今回、ビデオ「棟梁」や展示を見て、道具の大切さを再確認し、目の前の鉛筆1本でも大事だと、おもわず思ってしまった。竹中大工道具館は、宮大工さんがいる博物館として、体験も充実しているが、体験のスペースはあまり広くなく大勢に対応するときは多目的ルームを利用してきた。移転するときは体験室を広くとる、と話を聞いているので、この秋のオープンが楽しみである。恥ずかしがらずに体験すること、体験しないと分からないことは、たくさんあるのだ。

参考文献：竹中大工道具館パンフレット、ホームページ

海外交流事業

平成25年度 全日本博物館学会 第5回研究会 研究会 開催報告

井上 敏 (JMMA理事、桃山学院大学)

テーマ：国際フォーラム「高齢社会における博物館と社会福祉」

日時：平成26年1月5日(日) 13:30 ~ 18:00

場所：東京国立博物館平成館大講堂

共催：日本ミュージアム・マネジメント学会、日本展示学会

参加者：70名

本年正月早々に全日本博物館学会の第5回研究会として国際フォーラムが開催された。これまでの博物館に関する研究会で扱われてきたテーマとしてあまりない「高齢社会」という言葉で語られたこのフォーラムは日本展示学会と共にJMMAも共催として関わった。本学会にとっても今後、重要な視点になっていくと考えられるので、フォーラムの内容を会員の皆様にご報告する。



1. 概要

このフォーラムではイギリスのレスター大学からジョスリン・ドット博士 (Dr. Jocelyn Dodd) が、台湾の国立臺北教

育大學から林詠能博士がそれぞれの立場から、高齢社会における博物館と福祉に関わるテーマで講演し、それらに対して北名古屋市歴史民俗資料館の館長である市橋芳則氏がコメントする、という形で行われた。最後にパネル・ディスカッションと会場からの質疑応答が行われた。

このフォーラムは「近年、日本の博物館では高齢者や障害者が働くとともにその作品が展示され、地域の民俗資料や生活用具等の収蔵品を活用した回想法を取り入れた福祉活動も行われるようになってきている。しかしながら、こうした文化政策・博物館政策と福祉政策との連携に関する実践報告は数多くなされるようになってきたが、博物館学的な理論構築は未だ十分になされていない。そのため、文化庁の招へい事業を活用し、この研究課題に取り組んでいるレスター大学のジョスリン・ドット博士と国立臺北教育大学の林詠能博士を招へいし、高齢社会における博物館と社会福祉について、研究を深めること」（全日本博物館学会による開催要項より）を目的として行われた。

2. 「心・体・スピリット：博物館は人々の健康と幸せにどのような影響を与えるか (Mind, body, spirit : How museums impact health and wellbeing)」

まずレスター大学博物館学研究科博物館・ギャラリーリサーチセンター長のジョスリン・ドット博士から上記の演題で講演が行われた。初めにレスター大学博物館・ギャラリーリサーチセンター (Research Centre for Museums and Galleries: RCMG) の設立のビジョン、そしてその概要が説明された。次に2012年秋～2013年夏まで実施した5つのプロジェクトの成果を説明し、それに基づいて、博物館はコレクションを利用して人々の健康と幸福を向上させ、コミュニティの中での健康上の格差を是正し、公衆衛生に関する各機関の目標を達成するという社会問題に対して貢献することができた、とした。博物館と人々の健康と幸福の関係は医療に関する知識を伝達することだけでなく、館の多様な規模とコレクションによって各地域、各コミュニティに有意義な寄与ができるのであり、これからの博物館はそういったことも考えられていく必要があるという。

最後に日本の博物館は人々の幸福と健康はどのように位置づけられ、どのような関わりがあるのか?そして世界的な見地から日本の博物館は人々の健康と福祉の為にどのような関わりを持つことができるのだろうか?と聴衆に問題を投げ

かけた。

3. 「高齢社会における博物館のサービスについて (Museum Services in Ageing Society)」

2人目の講演者は台湾の林詠能博士で、上記の演題による講演となった。まず国連の人口調査で1950年～2050年の100年間の間の世界人口に占める65歳以上の割合に触れ、20世紀ぐらいまでは徐々に増えていたのが21世紀に入り急速に増加していく予想であること、更に日本においてもその状況が当てはまることなどが示された。更に台湾については具体的に14歳以下、15歳～64歳、65歳以上の人口比を図で示し、1993年～2018年は65歳以上の割合が7%～15%程度で「高齢化 (Ageing)」という時代、2025年までは20%で「高齢 (Aged)」、2060年には39%にも上り「超高齢 (super-aged)」の時代を迎えるという。

次に博物館のサービスの中で重要なパフォーマンスは何かというアンケートを取ったところ、一般の来館者に対するサービスに関する意識については一定の意識はあるが、高齢者が重要と感じているニーズに対しては非常に低いということが分かった。経済的にもコレクションの充実度としても国立博物館は他の地方自治体立・私立より恵まれた組織といえるが、国立博物館ですら未来の高齢社会に対する認識が非常に低く、積極的な高齢の来館者のニーズに対しては高齢の来館者が見学する際の問題点のみの調査しかしていないことが明らかにされた。

その問題点を踏まえて林博士は高齢の来館者のニーズとその嗜好を明らかにする目的でmixed methodという分析方法を用いて3段階の調査を行った。まずフェーズ1として国立博物館の4人のスタッフにインタビューを行い、高齢の来館者がどういったサービスを博物館に求めるかをまとめた。次にフェーズ2として2012年8月～9月に台湾の国立博物館において30人の高齢の来館者グループをサンプルとして質問調査を行い、フェーズ3として51人の高齢の来館者に質問調査を実施した。その結果、高齢の来館者が重視するのは一般の来館者とは異なった観点のサービスであった。例えば、自分と展覧会のテーマとの関わりを考慮して、行くかどうか判断する。入館してからは休憩する際の空間の整備、もっと言えばイスの数がどれほどあるかを気にし、トイレの数よりその清潔さを気にする傾向があるという。

このような調査結果を活用していくことにより、博物館は

来館者の要求する的確なサービスを組み合わせることができ、高齢の来館者にとって重要なサービスの提供をしていくことが促がされていく。そのことによって高齢の来館者にとって優しい環境を提供することができる、とした。そして最後に、このような高齢者の人口が増えていく社会において、博物館は積極的にその役割を果たし、その影響力を及ぼしていく必要があると、林博士は講演を締めくくった。

4. 「高齢社会における博物館と社会福祉：博福連携の試み (Aged Care through the cooperation of museums, welfare organizations and the medical field)」

3人目は北名古屋市歴史民俗資料館長の市橋芳則氏による2つの講演に対するコメントであった。まず現在の高齢化が進む社会において、博物館の来館者の平均年齢も確実に上がっていくこと、その為には博物館は高齢者を積極的に取り込んでいく必要性を訴えた。更に文部科学省委託事業で行った日本博物館協会の「博物館における高齢者を対象とした学習プログラムの開発」や「誰にも優しい博物館づくり事業」などが紹介された。

次に北名古屋市で取り組まれている地域回想法について説明された。地域回想法とは昔懐かしい生活用具などを用いてかつて経験したことを楽しみながら皆で語り合うことによって健康増進を図り、認知症を予防する、或いは世代内・世代間の交流を行い、地域づくり・まちづくりを行っていくもので、北名古屋市における昭和日常博物館、旧加藤家住宅、回想法センターの3つの拠点での活動について紹介された。またイギリスにおける回想法センター・博物館で行っている活動についても触れられた。

このような北名古屋市での取り組みの結果、活動に参加している方々の医療費は減少し、認知症の予防などにも効果があることが分かったという。この結果を受けて、市橋氏は博物館と福祉のセクショナリズム、すなわち縦割り行政の弊害を取り除くだけでなく、博物館と医療機関との連携を進めることによって高齢社会におけるまちづくりや地域再生、生涯学習に貢献し、認知症予防、世代間交流も促進されていくのではないかとした。また地域回想法などの成果から高齢者には博物館利用だけでなく、情報の提供者として博物館に寄与してもらうようにしてはどうかとも提案した。

5. パネル・ディスカッション及び質疑応答

3人の講演及びコメントの後、パネル・ディスカッションとなった。今回の高齢社会における博物館と社会福祉というテーマであるが、ドット博士によれば、イギリスでは数十年にわたって博物館と医療機関との連携は行われてきていること、特に最近20年はこの連携に対する関心が非常に高まってきているという。博物館の方も大規模館より小規模かつ地域に密着した博物館の方がこのような取り組みには積極的であるとのことであった。

対して林博士からは台湾においては日本と同様、高齢者に対する関心は薄く、国立科学博物館の例を除けば、ほとんど高齢者に対するプログラムは存在していないとのことであった。その原因としては国家の政策として経済効果のある事業を推進してきたことにあるという。また博物館と医療機関との連携について、認知症など人の病気との関わりである医療については国の倫理規定による制限があるため、この分野での研究は難しい要素があるとのことであった。

会場からはアートデリバリーという事業の事例紹介やこれからの博物館は高齢社会に対して積極的に関わらなければならないか、という意見が出された。これらに対して林博士は国立臺北教育大學美術館での美術治療の例をあげ、博物館は自らの使命と長所を踏まえて、利用者にサービスを提供していくべきであるとした。

一方でドット博士は市橋氏も主張したように高齢者が博物館の活動に積極的に関わっていける機会をしっかりと設けていくべきだ、とした。

最後に市橋氏は高齢者だけでなく、地域全体でこれからの社会のことを考えていくべきで、様々なプロジェクトをまとめ、高齢社会において博物館はどのように人々の健康と幸福を促進していくかを検討していくことが重要であると結んで、フォーラムを締めくくった。

新刊紹介

『博物館展示の理論と実践』

さとみ ちかゆき
里見 親幸 著

2014年3月発行

ISBN 978-4-88621-654-0

発行：(株)同成社 定価：2,800円＋税



近年、博物館の展示に関する論文や著書が数多く見られるようになり、これらは学芸員を目指す学生ばかりではなく、博物館学芸員、博物館関連学会会員等の教科書、参考書として活用され、日本の博物館の向上発展をもたらす重要な一つになっている。

こうした多くの著書等の中でも、このたび同成社から出版された里見親幸著「博物館展示の理論と実践」は、積極的に多くの関係者にお奨めしたい一冊である。著者は40数年博物館展示の構想から制作、国内外の博物館展示事例調査に携わり、それらを踏まえた理論構築を試みてこられた。この分野の理論、実践家としての著者の実績は周知の通りである。また日本ミュージアム・マネジメント学会理事として学会活動にも熱心に取り組まれていたし、私が私立大学学長時代に大学院の兼任教授としてお招きしたのも里見先生の博物館展示論に対する深い知識と実践力に絶対の信頼を寄せていたからにほかならない。

本書は第1章「展示とは何か」、第2章「博物館における学び」、第3章「展示空間の構成」、第4章「展示の芸術性・物語性・共感と感動」、第5章「展示の科学」、第6章「展示の解説と造型」、第7章「展示照明」、第8章「展示評価の現状と課題」、第9章「さまざまな博物館の展示」から成り、展示を学ぶうえでの内容は殆ど網羅されているといえる。とにかく展示事例を可能な限り挙げながら執筆されているのが特徴であり、非常に説得力がある。それぞれの章ごとに特徴など紹介すべきことが多いが、紙数の関係もあるので展示の在り方や、企画展開催にかかわることなど、1、2点だけコメントするにとどめたい。

本書全体の内容が展示の理論と方法についての研究であり、それに相応しいコラムが49掲載され、その内容には学ぶところが大変多い。このコラムをもとに議論すれば、かなり得るものが多いはずだ。例えば第2章の「6、展示の社会性」でカナダモントリオール郊外セントエレーヌ島に設置された環境博物館「ビオスフェール（生命体の球）」と、「広島平和記念資料館と大阪国際平和センター」をコラム6、コラム7として紹介しているが、これらは展示の社会性を考える重要な学びにつながる例であろう。著者が述べられているように、博物館の展示は確固としたポリ

シーに基づき、博物館の良心と社会的役割という考え方に支えられていなければならない。博物館の展示は展示の持つ思想を観覧者に押し付けるべきではなく、展示を見て何を感じ、何を学ぶかなどは見る人自身に委ねられるものにはある。しかし、単にモノを並べておく陳列とは異なるのであるから、ある思想や主義主張を具体的に展示として表すのは当然であり、それが博物館展示の社会的役割であり、責任ともいえる。スペースの関係で十分に言及できなかったが、この問題は重要なテーマである。

また何といっても展示は博物館の顔であり、博物館教育の中核である。それだけに観覧者が展示を見て感動したかどうかは極めて重要な問題である。学芸員はそのための様々な創意工夫を図っているはずであるが、ともすると観覧者サイドに立つというよりも学芸員の独りよがりの考え方や、集客に力点を置いた企画展になってしまって、必ずしも観覧者の感動に結びついていないという批判は決して解消していない。その点で本書第4章では展示の芸術性や物語性、さらに共感と感動の問題が取り上げられていて参考になる。特に共感と感動の展示に関して、観覧者の心の琴線に触れるポイントとして、「展示を作る作り手自身が感動できることが重要である」という著者の指摘は納得出来る。作り手自らが感動できるものを作ろうとしなければ、観覧者が感動することはないと思ってよいであろう。そのことを学芸員がどれだけ意識しているかが、いま問われているのではなかろうか。

また最近では集客ばかりに重点が置かれ、そのためなら何でもありの姿勢が指摘されるケースがある。「この美術館の思想、コンセプトはどうなっているのか」といった地域社会からの厳しい批判につながりかねない。展示とは何か、をあらためてしっかり議論することを怠ってはならないと思う。

いずれにしても本書には随所に展示の在り方とともに、広く博物館全体の問題を考えさせられる内容が豊富に記述されていて大変参考になる。博物館学芸員を志す学生、博物館に関わる行政担当者、博物館学研究者や博物館関連学会員など多くの人々に本書を強くお奨めしたい。

大堀 哲 (JMMA会長、長崎歴史文化博物館 館長)

INFORMATION

文献寄贈のお知らせ

- 長崎歴史文化博物館
『研究紀要第8号 (2013)』『長崎歴史文化博物館 史料叢書六 福濟寺関係史料』
- 公益財団法人 多摩市文化振興財団 (パルテノン多摩)
『パルテノン多摩 博物館部門 研究紀要 Vol.12』『「みゆきのあと - 明治天皇と多摩 -」展示図録』
『パルテノン多摩収蔵写真資料集 空から街を見る』
- 美濃加茂市民ミュージアム
『紀要 第13集 2014』
『～平成26年度の活用に向けて～みのかも文化の森 活用の手引き・活用実践集 平成25年度版』
- 明治大学学芸員養成課程
『MUSEOLOGIST 29 2013年度年報』『MUSEUM STUDY 25 2013年度紀要』

新規入会者のご紹介

- 【個人会員】 亀谷 敦 (山口県立山口博物館)
佐々木 奈美子 (佐賀大学美術館)
関谷 泰弘 (東京国立博物館)
森影 依 (株式会社ミュゼジャパン)
柳澤 剛 (清瀬市郷土博物館)
山岡 ヒロミ (市民団体かぐや媛)
- 【学生会員】 延藤 裕之 (愛媛大学大学院)

(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・
マネジメント学会
法人会員一覧

(2014年6月末現在)

株式会社アートプリントジャパン	東京家政学院大学
アクティオ株式会社	東京家政大学 人文学部 教育福祉学科
公益財団法人 阿蘇火山博物館 久木文化財団	株式会社トータルメディア開発研究所
株式会社江ノ島マリンコーポレーション	内藤記念くすり博物館
カロラータ株式会社	長崎歴史文化博物館
公益財団法人 交通科学博物館	株式会社西尾製作所
佐賀県立宇宙科学館	株式会社乃村工藝社
サントリーパブリシティサービス株式会社	株式会社文化環境研究所
公益財団法人 竹中大工道具館	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
公益財団法人 多摩市文化振興財団	UCCコーヒー博物館
株式会社丹青研究所	早稲田システム開発株式会社
株式会社丹青社	(五十音順・敬称略)
公益財団法人 つくば科学万博記念財団	学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No.70 (Vol.19 no.1)

発行日 2014年6月30日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、津久井真美

HP: <http://www.jmma-net.jp/index.html> e-mail: kanri@jmma-net.jp

印刷制作 光画印刷株式会社